

藤舎 貴生（とうしゃ・きしょう）先生

横笛奏者・作曲家

横笛奏者。邦楽囃子二世家元、中村寿鶴を祖父とし、
藤舎呂悦の長男として京都に生まれる。
囃子を藤舎流宗家藤舎せい子、笛を藤舎名生、
長唄を今藤政太郎、マリンバを山本毅に師事。
東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業後、専門楽器を横笛とし、
歌舞伎、日本舞踊はもとより、クラシックコンサートにソリスト
として招かれるなど幅広く活躍。
黒田征太郎、武田双雲、世界チャンピオン DJ、KENTARO など
異種アーティストとの共演も多い。
近年作曲も多く手がけ、代表作に「静」「梅雨將軍信長」
「一心行桜」など。NHK大河ドラマの横笛指導、
プロデュース・企画公演も行う。池坊文化学院特任教授歴任。



〈講義概要〉

横笛奏者・作曲家として日本の伝統芸能文化の発展のために尽力する藤舎貴生氏が、日本音楽の魅力や口語体による邦楽音楽劇について、古事記から「幸魂（さきみたま）奇魂（くしみたま）」を核に講義を行った。

講義ではまず、純邦楽と呼ばれるジャンルに焦点を当てて、和楽器の素材や繊細な構造、演奏方法等について写真や舞台映像を用いながら分かりやすく説明。そして、実際に横笛を演奏し、「デジタルが発達し、世の中が益々便利になるこの時代だからこそ、『不自由』な邦楽の良さを感じてもらいたい」と邦楽の奥深い魅力を伝えた。学生は生の演奏に感銘を受けるとともに、デジタルとは異なる邦楽独特の美しい音色や迫力を肌で実感した。

また、文語体を分かりやすい口語体にした新たな邦楽音楽劇「幸魂奇魂」をプロデュース・作曲した経緯や伝統文化を守り存続させていくために行っている様々な活動について、裏話を織り交ぜながら紹介。多くの人に伝統芸能の魅力を知ってもらいたいという熱い思いや、「常に革新者がいてこそ、古典は受け継がれる」との言葉は学生の心に強く響いた。

最後には、CD アルバム化された「幸魂奇魂」の舞台の映像を上映し、世界に誇れる日本の伝統芸能文化にもっと目を向けることの大切さを訴えけるとともに、「物事を諦めずに、努力することの大切さ」など、人生において大切な考え方も示した。

《受講生の感想》

●「古典は守るだけでなく革新者がいてこそ受け継がれる」という言葉が印象的でした。邦楽に詳しくない人が邦楽を知り楽しめるような機会をつくるというのは邦楽をこれからも伝えていくために必要なことだと思います。「不自由さの良さ」というのは考えたこともありませんでしたが、これからはその不自由さのよさ、日本の財産である伝統文化に目を向けていきたいという気持ちになりました。

立命館大学・法学部・3回生

●私たちのような若い世代が日本の伝統芸能を理解する機会は少なく、そのような私たちに理解できるように伝統を守りながら革新していくという考えは本当に素晴らしいと思います。伝統を守るためには、古典を守る人と革新者が必要だということがよく分かりました。伝統芸能がこれからも受け継がれるための道が作られているのだと思いました。

立命館大学・産業社会学部・3回生

●あまり見たり聞いたりする機会がない日本の伝統的な楽器について知ることができてよかったです。その楽器によって手入れも違うなどいろんな違いがあることが分かりました。様々なものが電化されていくこの社会の中で、こういったアナログ式のものが存在し続け、伝統として残っていくのは素晴らしいことだと思います。

立命館大学・産業社会学部・2回生

●日本の伝統芸能の世界についてお話しいただき、繊細さであったり迫力であったりと素晴らしい世界観を知ることができました。時代が進む中で音楽世界でも便利さやデジタルというものが注目されていき、もちろんそのようなことも面白味があります。しかし、伝統芸能として続くものを私たちは誇りに思わなくてはならない。目を向けないともったいないと感じることができました。

立命館大学・産業社会学部・3回生

●楽器の種類や素材、またなぜその素材が使われているのかなど詳しく教えてくださって、とても分かりやすかったです。特に湿度や温度の変化と楽器の関係が興味深かったです。文化や伝統、古典が継承されていくのには、どの時代にも革新者がいるという先生の言葉が印象深かったです。今回の授業で純邦楽にとっても興味が湧きました。最後の幸魂奇魂の演奏で鳥肌が立ちました。是非一度生演奏を聞いてみたいです。

立命館大学・産業社会学部・4回生

●今日の授業で伝統芸能文化の重要性をとっても感じた。特に「古典を守る人」と「革新する人」が同じ速さで進まなければならないという話が印象的であった。今まであまり方角についてちゃんと見たことがなかったが映像や先生の実演でとても身近なものだと感じた。

立命館大学・映像学部・2回生

